

シンポジウムを振り返って

三木直大

1998年に発足し活動をつづけてきたアジア社会文化研究会も、今年度で11年目に入り、また研究誌『アジア社会文化研究』も10号という節目を迎えることになる。この研究会は、教員も協力はしないわけではないが、定例研究会の運営にしる研究誌の編集にしる、すべての面で院生の皆さんの活動と奮闘によって続いてきた研究会である。ところが、いま、この10年という節目を迎えるにあたって、なかなか新規の研究会メンバーが集まらないという現実直面している。

この研究会の院生メンバーは、総合科学部に関わる大学院組織の変転もあって、社会科学研究科国際社会論専攻、国際協力研究科文化コース、総合科学研究科のどこかに所属してきたものがほとんどである。それは、総合科学部所属のアジア研究の教員が、大学院改革のなかで所属を転々としてきたこととも、大きな関係がある。そして、現在は、3年前に発足した総合科学研究科に所属しているものが多い。

だが、そうした変転はあるにしても、現状では、大学院に入学してくる院生数に、以前とそう大きな変化は総数としては認められない。留学生が多いというのも、今に始まったことではない。アジアとの接点があれば、アメリカ研究やヨーロッパ研究をはじめ、他領域の院生たちにも参加を呼びかけている。なのに、新規メンバーがなかなか集まらなくなっているのはどうしてなのだろうか。そうしたことを、私たちは緊急の課題として考えざるをえなくなり、何とかしなければと思うようになった。そこでの結論のひとつが、新しく大学院に進学してくる院生の皆さんに、この研究会の存在を広く知ってもらうことが、ともかくいちばんではないかということであった。

そこに、おりよく、総合科学研究科の発足にともなって、「文理融合型リサーチマネージャー養成プログラム」という大学院G Pが走り出し、そこで「学生独自プロジェクト」の募集が行われることになった。プロジェクトの

採用は一年度きりのものだが、大学院G Pの一環として、研究会活動を行い、研究誌を刊行することをやってみよう。そうすればアジア社会文化研究会もより多くの院生たちに存在が認知され、新規メンバーも増えるのではないかと。また、定例の研究会だけではなく、大きなイベントを行い、積極的にアピールしてみようということが計画された。そして、幸運にも企画は採用され、そこで開催されたイベントが、今回のこのシンポジウムである。

それについては、9号の編集委員長の古川直樹くんが、編集後記に「本研究会は、広島大学大学院総合科学研究科が募集した研究助成、平成20年度「学生独自プロジェクト」に採用された。申請したプロジェクトにおいては、本研究会が「地域研究の学際性を志向する」研究会であることを銘打ち、地域研究の発展を目指して活動することを明記している。これとの関係で、地域研究のあり方を主題としたシンポジウムも開催する」と書いているとおりである。また、シンポジウムを開催するにあたっての詳しい経緯は、研究会会長の光武昌作くんが「巻頭言」に書いているとおりである。

とはいえ、準備には、ずいぶん議論を重ねた。どういう議論かというと、たとえばの例だが、私はいま、学部は地域科学プログラム、大学院は地域研究領域というところに所属している。院生メンバーも大半はそうである。もちろんこうしたネーミングは教育と研究という制度としてのものだから、所属する組織の内部は多様で、教員も様々、大学院生の研究課題も学部生の卒業論文も実に様々である。だが、教員であれ、学生や院生であれ、おそらく専門を尋ねられて、地域科学ですとか地域研究ですとか答えるものは、まずいないのではないかと思う。

というのは、地域科学とは地域を科学するという意味だろうし、地域研究とは地域を研究するという意味だろうが、それは専門性を表す言葉としては、あまりに大枠すぎるからである。専門性を表すためには、少なくとも地域研究のうえに地域名を冠につけないといけなくなる。日本研究とかアジア研究とかヨーロッパ研究とかといった具合にである。また、アジアをフィールドとした文化人類学とか、東アジア地域の文学研究とかといった具合である。

私事になるが、大学で教員をしているということがわかると、よく専門は何ですかと聞かれる。聞かれるといつも一瞬、返事につまる。私は中国語圏

(中国を含むが中国ではない)の現代文学や映画、日本植民地時代を含めての台湾の文学の研究を主な専門領域としてはいるのだが、自分でもどう答えを返したらいいのかよくわからないところがあるからである。しかし、正直にそう言っても、理解してくれる人はめったにいないから、そこで少し間において、相手が何を期待しているだろうかを考え、いつもか用意している答えのなかから選んで、とにかく答えを返すことになる。

何を言いたいのかというと、研究者どうしても、それぞれが自分は地域研究をやっていると思っけていても、地域も方法も対象もまったく違う。自分で地域研究だと思っけていても、別の研究者から見ると、そんなのは地域研究ではないということになるかもしれないということである。地域研究を **Area Studies** の訳語だととらえると、ますますそうである。となると、研究会のメンバーもお互いに、メンバーが何をやっているのかわかっているようで、わかっていないのではないかと、相互理解ができていないのではないかとということである。そのことに議論の中で気づいたのは、大きな発見でもあった。ならば、少なくとも、院生メンバー相互が、お互いに何をやっているのか、どんな研究方法をとっているのかをわかる必要がある。それを相互に理解するためだけでも、シンポジウムの開催には大きな意味があるのではないかとということになった。

そういう観点から、今回の報告をみていくと、光武くんは、地理学をベースにして、広島県という地域の農産物を中心とした商品流通の研究をしている。越智郁乃さんは、文化人類学をベースにして、沖縄という地域の墓の変容の研究をしている。何資宜さんは、文学研究をベースにして、太宰治を中心に日本近現代文学の研究をしている。何さんは台湾人留学生だから、台湾から見ると、彼女の研究は台湾人の日本研究のひとつということにもなる。逆に川原絵梨奈さんは、歴史学をベースにして、戦後台湾社会のエスニク・グループのポリティクスを研究している。

こうして並べていくと、なるほど研究の中心にしている地域があるから、地域研究ということになるかもしれないが、どういう学問分野をベースにしているかということ、その差異のほうが大きい。定例の研究会で発表しあって、お互いのことがわかっているつもりでも、分野が違うということを前提にし

て、遠慮しい、専門が違うからとお互いの研究のなかに踏み込んでみるということをしてこなかったように思える。もちろん「越境」や「総合」などということは安易にできることではないし、そのこと自体を目的化してしまえば、専門性そのものが弱体化してしまう。だが、相互に理解しあうためには、なんらかのコアになる部分が必要だ。ならば、地域研究をたんなる地域の研究という意味でとらえるのではなくて、何かある方法的態度や研究の姿勢というものとして、とらえなおしてみることができないだろうか、そうしたコアになるものを、シンポジウムの議論をとおして発見できないだろうか。こうした考えが、メンバーのなかに、シンポジウム開催の共通の目的意識となるようになった。そして、シンポジウムでは、報告者がそれぞれ準備を重ねた発表を行い、基調講演をお願いした加藤博先生をはじめ、ぜひこの方々と発表者がそれぞれお願いしたコメンテーターの先生方も、熱の入った議論を展開して下さい。

こうまとめてみると聞こえはいいのだが、しかし、いまシンポジウムを終えてみて、目的としていたものが実現されたかということ、それはなかなかおぼつかないというのも、シンポジウムの運営メンバーの共通する思いである。全体を通して提示されたのは、地域研究という名の下に行われていることが、いかに様々であるかの再認識という、しごく当たり前すぎる結果であったともいえる。だが、実はそのこと自体に意味があったのではないかと、私は考えている。越境や総合には高い壁がある。何故なら、研究にはそれはそれぞれの専門性に裏づけられた経緯があり、その壁を安易に取り払ってしまうと、繰り返しになるが専門性が担保されないことになりかねないからである。また、越境や総合は、そのこと自体が目的なのではなくて、わかりたいと思うことを発見し、わかりたいことをわかるための必要に応じてなされるべきものであるはずだからである。だから、自己意識的に、方法を模索しながら、越境や総合の歩みを遅々としてすすめていくことが研究なのだということが、堂々めぐりの議論のなかで再認識されただけでも、このシンポジウムは成功だったと思うのである。

ただ、残念なことは、シンポジウムに院生の参加が予想以上に少なく、研究会への新規メンバーの参加が、シンポジウムを終わったいまも、やはりお

ぼつかないことである。シンポジウムのテーマが広がりをもたなかったのだろうか、何より私たちの努力が足りなかったのではないか、そういう思いにもかかれている。企画を採用して下さった吉田光演先生はじめ総合科学研究科の大学院GPプログラム運営の先生方、シンポジウム開催に協力して下さったリサーチマネージャー養成プログラム事務室の河崎さん、山本さん、そして土曜日であるにも関わらず、会場でシンポジウムに参加して下さった多くの先生方や研究会の先輩諸氏、友人の発表に駆けつけてくれた院生の皆さんに感謝する一方で、それが私にとってはいちばん気がかりな、そして今後に向けてのいちばんの課題でありつづけるアジア社会文化研究会の最初の10年の区切りのシンポジウムであった。